

はしがき

本書は、高齢者や老いに対する態度であるエイジズム（AGEISM）の特徴を明らかにするために、日本の社会文化における高齢者ステレオタイプを分析したものである。特に、ステレオタイプが根強く存在しながらも変化すること、ジェンダーによる違いがあることを、大衆文化である映画に登場する高齢者の人間関係、特徴やセリフの実証的分析を通して明らかにした。

なぜ、筆者がこのような研究をするようになったかについて2つのエピソードと文献との出会いから説明しておきたい。筆者は京都で留学を始めた2004年に、バスや下宿先近くの商店街で見かける高齢者の多さと元気さに圧倒された。韓国は2000年の人口高齢化率が7.2%（日本17.3%）であったため、筆者はエイジズムに満ち溢れた目で日本の高齢者を観察していた。例えば、「腰の曲がった弱々しくて、家族に支えられて暮らすはずの高齢者がこんなに元気に外出できるのか」というような疑問を常に抱いており、母国の両親に報告をしたくらいだった。筆者自身が強い Ageist だったと思う。

もう一つのエピソードは、70代の日本人女性との会話である。彼女は薄い黄色のブラウスを着ており、それについてきれいな色だと話しかけた。その際、彼女は息子から「その歳でそんな派手な服着る？」といわれたことを説明してくれた。これは、まさにエイジズム的な考えであり、高齢者はより地味な色（目立たない色）の服を着るべきというステレオタイプ（考え方）をその息子さんはもっていたのだろう。

筆者が高齢者を「腰の曲がった弱々しい存在」と思い込んでいたこと、70代の女性の息子さんが「明るい色は高齢者が着る服装の色ではない」と思い込んでいたこと、これらのことは決して珍しいことではないと思う。なんとなく思う「高齢者」「老い」のイメージは日常生活に浸透しており、気づいていないだけであって、私たちは常にエイジズムと向き合いながら生きているのかもしれない。

エイジズムがなぜ問題なのかは、高齢者に対する間違った認識による高齢者

差別や高齢者虐待のような高齢者人権問題がひとつの例としてあげられる。さらに、筆者はエイジズムが人間の「生」の問題につながるため、年齢にかかわらずだれもが考えるべき問題だと思う。

このような問題意識をもつようになったきっかけは、アメリカの反エイジズム運動家であるアッシュトン・アップルの著書 *This Chair Rocks: A Manifesto Against Ageism* (2016) を読んだことである。アップルホワイトは自らの経験からエイジズムについて反論しており、一般の人々にエイジズムに気づいてもらうための活動を続けている。アップルホワイトの著書にある“Aging is living”はエイジズムの弊害をもっともよくあらわしている表現である。老いを否定的にとらえることは、日々の「生きる」を否定することになりかねないのではないだろうか。これこそエイジズムが社会や個人に与える弊害であると考えられる。

しかし、どうすれば日常に浸透しているエイジズムを克服することができるだろうか。この問いについて、筆者はアードマン・パルモアの本からヒントを得ることができた。

パルモアは彼の著書『エイジズム』(1990=2002)でエイジズムの具体的事例を挙げながら分析し批判した。パルモアの本を読んだことをきっかけに社会文化におけるエイジズム研究の重要性と面白さに目覚め、一人で執筆したとは思えない膨大な知識とデータに圧倒された。そこで、日本でもエイジズムの具体例を取り上げ、研究者だけではなく一般の人々にもエイジズムについて知ってもらい議論すべきと思った。これらのことから、筆者はエイジズムを克服するためには、エイジズムに気づくことが最優先にされるべき課題だと思った。

一方で、高齢者の ICT 活用、ファッションナブルな高齢者の写真が話題になることもある。例えば、韓国のパク・マクレさん(1947年生まれ)は133万人のチャンネル登録者をもつ世界的に人気のある YouTuber であり、日本でも「80歳の YouTuber 不二子の日常」など高齢の YouTuber は増えている。例で取り上げたこれらの高齢の YouTuber は、自分の人生を主体的に生きており、自ら年齢にとらわれない生き方を選んでいるのである。

上述のように、高齢者に対する思い込みによる見方(エイジズム)がある一

方で、自分の人生を主体的に生きる高齢者が注目されるような変化が生じていることは、エイジズム研究に示唆することが多い。なぜなら、根強い高齢者ステレオタイプが存在する一方で、既存のステレオタイプにとらわれない高齢者が登場し注目されるという社会の変化が明らかに起きているからである。すなわち、これは高齢者や老いることへの見方が変わりつつある証拠なのである。

これらの社会の変化は、エイジズム研究にも反映させるべきだと筆者は考える。例えば、根強い高齢者ステレオタイプとその変遷にはどのようなものがあるのかを明らかにすることは重要な研究の視点であろう。なぜなら、変化が生じているということは、ステレオタイプといえども変えることができる、つまり、克服できることを意味するからである。

上述の問題意識から、本書が行う研究は、既存のエイジズム研究で指摘され続けてきた個人レベルではなく社会レベルのエイジズム、既存の研究では注目されることが少なかったステレオタイプを明らかにすることを課題とする。この課題に取り組むために、大衆文化である映画を分析素材に、登場する高齢者の特徴、役割、人間関係などの非言語的側面の分析とともに、セリフという言語的側面の分析を行う。さらに、人口高齢化率とともに高齢者ステレオタイプにも変化がみられるのかを確認し、ジェンダーによる違いを比較分析する。

このような本書の研究素材と方法および分析視点は、これまでのエイジズム研究では類のないオリジナリティのあるものである。また、多年にわたる多様な映画を分析したため、縦断的かつ横断的なデータ分析ができた。さらに、本書の研究は、これまで個人のエイジズム意識にもつばら注目してきた日本のエイジズム研究の範囲を広げるという意義がある。

本書は、同志社大学大学院社会学研究科に提出した博士学位論文『日本における高齢者に対するエイジズムの変遷—映画にみられるステレオタイプの分析から』を加筆修正したものであり、基礎的実証研究として位置づけられる。

本文は、6章で構成されており、第1章は日本のエイジズム研究の到達点と課題を明らかにするための先行研究のレビュー、第2章はステレオタイプと映画を分析素材にする際の意義をまとめたいうえで、具体的な分析方法や素材につ

いて説明する。

本書で分析対象とする映画は、日本の人口高齢化率が7%を超えた1970年（高齢化社会）から2016年までに上映されたものから選定している。まず、①多くの人が観覧したため社会で共有されている高齢者ステレオタイプを確認できるという側面から興行収入上位映画（第3章）、②高齢者を中心としたストーリーのために高齢者と高齢者を取り巻く状況が確認できるという側面から高齢者が主役の映画（第4章）を分析する。さらに、1970～2016年までの上映映画の分析結果が他の時期に上映された映画でもみられるのかを確かめるために、『東京物語』（1953）と『東京家族』（2013）を比較分析する（第5章）。また、計82作品の映画分析から得られた高齢者ステレオタイプを類型化し、①高齢者の人間関係、②高齢者の自立と他人への支援、③衰え・弱さ、④人間の欲求から超越した存在、⑤否定的にとらえられる高齢者や老いの5つのステレオタイプについて、持続的な部分と変化がみられる部分をまとめる（第6章）。

本書は、既存のエイジズム研究で指摘されつつも行われてこなかった研究分野への挑戦である。大衆文化である一般になじみやすい映画を素材にしたため、学術書ではあるが一般の読者にもエイジズムに関心をもってもらい、エイジズムの実証的基礎データと克服の糸口を提供することが本書刊行のねらいである。この本を手にとっていただく読者のみなさまにとって、この本が老いることとエイジズムについて今一度、考えていただく機会になればと思う。

2020年9月

朴 蕙彬